

をよく仕込たるならではよろしからず、雪の上のみを行なれば、其中にも人々踏ならして、一筋かたまりたる所を行にもし傍なる和なる所へ半分か、れば、雪車横さまに倒れて、人も横さまに落るを、犬はかまはずむえやうに引て行を、先に立て行人あればとめてくれる事也、下り坂になれば、彼棒を前へ押かひ、あひしらはざれば進み過る也、一軒の家にて、是は誰が犬彼はたが犬とて、銘々に食をあたへ飼置事也、食ハセリジニシンの事也、を五六ヅ、與フる也、遠方へ行時は前夜に八ツ九ツ計も食せ置て、其朝は先へ行つくまでくはせぬ也、はやく行てくはんとていそぐ也、按に犬に雪車を引すること蝦夷草紙、東遊雜記などにも見ゆ、

〔太平記 二十二〕畑六郎左衛門事

畑六郎左衛門ト申ハ、武藏國ノ住人ニテ有ケルガ、略中彼ガ甥ニ所大夫房快舜トテ、少シモ不劣惡僧アリ、又中間ニ惡八郎トテ、缺唇ナル大力アリ、又犬獅子ト名ヲ名タル不思議ノ犬一匹有ケリ、此三人ノ者共闇ニダニナレバ、或ハ帽子甲ニ鑢ヲ著テ足輕ニ出立時モアリ、或ハ大鎧ニ七ツ物持時モアリ、様々質ヲ替テ敵ノ向城ニ忍入、先件ノ犬ヲ先立テ城ノ用心ノ様ヲ伺フニ、敵ノ用心密テ難伺隙時ハ、此犬一吠吠テ走出、敵ノ寢入夜廻モ止時ハ、走出テ主ニ向テ尾ヲ振テ告ケル間、三人共ニ此犬ヲ案内者ニテ、屏ヲ乗越城ノ中へ打入テ、叫喚テ縦横無礙ニ切テ廻リケル間、數千ノ敵軍驚騒テ城ヲ被落ヌハ無リケリ、夫犬ハ以守禦養人トイヘリ、誠ニ無心禽獸モ、報恩酬徳ノ心有ニヤ、

〔甲陽軍鑑 品第六〕信玄公御時代諸大將之事

一武州岩つきの住人太田源五郎、後に太田美濃と云、此者幼少より、犬ずきをする、ある年武州松山の城を取もつ己が居城は岩つき也、然れば松山にて飼たてたる犬を、五十疋岩付にをき、岩付にて飼たてたる犬を、五十疋松山におく、各の沙汰に太田美濃はうつけたる者也、稚者のごとく、